
のど飴、上履き、時計塔

アサガタネムル

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

のど飴、上履き、時計塔

【Nコード】

N3543D

【作者名】

アサガタネムル

【あらすじ】

あの日、時計塔の屋上で君が僕にくれたのは、目を閉じてそれを舐めながら、深呼吸を三回するとどんな困難だった一発で解決出来る、魔法の“のど飴”だった…ある男子高校生と女子高校生の甘く切ない物語です。

(前書き)

注意 ハッピーエンドをご期待の方は、覚悟していただきますようお願い致します。

のど飴、上履き、時計塔

僕は、時計塔の中央にある螺旋階段に足をかけた。時刻は夜の11時過ぎ。外では、純白の羽毛のようにふんわりと、雪が降り続いている。

時計塔の中には雪が降っていないけど、そのぶん、身を切るようなキンとした寒さばかりが目立って、まるで冷凍庫の中にいるような気分だ。階段を登りながらはく息が白い。僕は、一段一段、踏みしめるようにして階段を登っていった。何段ぐらい上っただろうか、ようやく階段を登りきり、時計塔の屋上へと続く扉の前にたどり着いた。冷たく思い鉄製の扉を押し開けると、そこには、素晴らしい景色が広がっていた。

時計塔は、市街地を少し離れた高台に建っているのだが、その屋上からは、市街地から放たれた光が降り注ぐ純白の雪に反射して、世界を漆黒に染め上げる宵闇を拒絶するかのように燦然と光輝く様子が一望できる。

彼女は、よくこの光景のことを話してくれた。

「春の麗らかな青空の下に広がるここからの景色もいいけれど、夏の夜の満天の星空の下に広がるここからの景色もロマンチックで素敵だけど、秋の夕暮れに包まれた哀愁漂うここからの景色も捨てがたいけど、でも、一番好きなのは、冬。しかも雪の夜にしか見れないここからの景色だけが唯一、私を、この世に繋ぎ止めるほど魅了するの」

彼女が、そういつて、微笑みながら僕のほうを振りかえってくれたあの夜は、残念ながら夏だったけれど、あの時、僕は景色なんてどうでもよくて、実は、君の顔ばかりみてたんだ。

「どの季節のここからの景色よりも、君の笑顔が一番素敵だと思う

よ」なんて、さすがにこつ恥ずかしくていえなかつたけど。というより、そんなことを言った日には、君はきつと顔を真っ赤にして頬を膨らませながら、お気に入りの上靴を片方ぬいで、「ばば馬鹿じやないの！」なんて言いながら僕に殴り掛かってきたりしたんだろうけど。

そうそう、上履きで思い出したけど、僕はまだ、君にもらった魔法の“のど飴”、使わずに大事にもってるんだよ。嫌なことや、困難なことがあるたび、挫けそうになる僕に、君はこの飴をくれた。「この飴には、私の元気が注入してあるの！もし、本当にどうしようもない困難に直面して、死にたくなるぐらい挫けそうになったら、この飴を舐めるの！この飴をなめながら、三回深呼吸するとどんな困難だつて一発で解決出来るんだから！」

この世に不可能なんかなくて顔をして、胸を張りながら得意気に話す君を見たら、悩みなんかどっかにいってしまったって、僕はつい吹き出してしまったんだ。君は、「あ、信じてないな！ふん、いいもんね、そんな奴にはあげない！」とか言ってますねちゃって、僕は三回まわってワンとかいう罰ゲームまでやらされてようやく君の機嫌をなおして、この魔法の“のど飴”を手に入れたんだ。でもね、折角もらったのに、結局つかってないんだ。だってさ、どんな困難だつて一発で解決出来る“のど飴”だよ！いざ使いたくないような場面にでくわすと、いや、まだここで使うには惜しいな…とか考えちゃって、結局、自力で解決してきちゃったんだよ。いざというときはこの飴があると思うと、不思議と気持ちにゆとりが出来て、この飴は、いつしか僕の御守りになってたんだ。

君はもう一つ宝物を持っていたね。そう、いつだったか君は、君のあのお気に入りの上履きは、“魔法の上履き”なんだって話してくれた。

「この上履きを履いて、目をつぶって行きたい場所をイメージしな

がらジャンプすれば、一瞬でそこに連れていってくれるんだよ！」
僕が、「じゃあ跳んでみてよ」っていうと、「きき今日は調子が悪いからちよつと無理なの！ な、なによ、本当なんだから！」とかいいながら、僕にキックをかましてきたんだった。

ねえ、君は結局、君の望む場所へ飛んでいけたのかな？

君がいなくなつてから、僕は毎日が後悔の連続だった。もし僕が、君からこのどんな困難だつて一発で解決出来る魔法の“のど飴”を取り上げなかつたら、君がその上履きを使うことは無かつたのかな？ 僕がもつとすっかりしてたら、いつも明るそうにしていた君の本当の顔に気付いてあげられたのかな？

君がこの時計塔の屋上から旅立ってしまった今となつては、君にそれを確かめるすべは無い。いや、実際はある。けれど、僕にその勇気が無いだけだ。だから僕は、今こそこの飴を使おうとおもつんだ。

僕は、魔法の“のど飴”を口に放り込み、目を閉じて深呼吸を三回繰り返したあと、一歩ずつ歩み始めた…

(翌朝、日売新聞より)

今日、午前7時頃、市内において、男性の遺体が発見された。第一発見者は同市内に住む主婦で、毎朝の日課であるジョギングの最中、市街地から少し離れた場所に位置する時計塔の付近で遺体を発見した。遺体の身元は、その遺留品から市内にすむ男子高校生であると判明。警察は、自殺として捜査を進めているが、先月も、同じ時計塔から女子高校生が飛び降り自殺をしており、事件の関係性を調べている。

（後書き）

初めまして、アサガタネムルと申します。今回、初めて完結した小説を投稿させていただきました。元々は、小説をかく練習として、三題嚙を書いていたとき、“のど飴”、“上履き”、“時計塔”という全く関連性のないお題のもと書いたものです（笑）最後までお付き合いいただき有り難うございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3543d/>

のど飴、上履き、時計塔

2008年11月7日07時48分発行